

氏名	スギ ヤマ アヤ カ 杉 山 礼 香
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	博 美 第 314 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉 Invisible books シリーズ、Traces 〈論文〉 意識、透明な痕跡
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教授 (美術学部) 保 科 豊 巳
(論文第 1 副査)	美術評論家 鷹 見 明 彦
(作品第 1 副査)	東京芸術大学 教授 (美術学部) 小 山 穂 太 郎
(副査)	〃 准教授 (〃) O J U N
(〃)	〃 〃 (〃) 大 西 博

(論文内容の要旨)

私は、いま白い紙の上に、未見の風景を見ようとしている。まだ形の定まっていない塊に、自らの望む形を見る。頭の隅では、常にまだ見ぬものを描いては思考し、そこに不可視の自己を投影しようとする。それは、単なる想像の産物だけではない。私が生活している世界のあちらこちらに、その思考を働かせるヒントがあり、次なる行為を助長している。思考や体験といった、経験的要素から端を発する創作行為は、こうして、作り手自身の意識をも映し出すことを可能とする。

私はこれまで、不可視の状態を提示する作品を創り続けてきた。それは、こうした私の生活にまつわる「見ること」への疑問に対する、実験と考察でもあった。というのも、我々が実際のところ見ているものとは、一体何なのであるかという問いに関心があったからである。網膜に映った景色は、意識という個性を持ったフィルタを通り、脳内で判断される。この意識の存在によって、我々は目の前の状態に対して、それ以上の状態を「見ること」を行っている。しかしながら、もしその意識のフィルタに頼らずして見た場合、そこに現れるであろう、ものの本当の姿とはどのようなものなのだろうか。私は、これから挙げるいくらかの検証と制作体験から、とりわけ「見ること」という眼差しの、その先にあるものを探し出すことを試みた。

本論文では、「見ること」に含まれる意識の作用を、作家の視点から検証した。

第一章「意識はいつ始まるか、行為はいつ始まるか」では、我々が行為を起こす動機となるもののひとつ、「知ること」によって得られるものを、まずはヴィトゲンシュタインの言葉とバゼーヌの体験記を手がかりに確認した。しかし同時にこの「知ること」には、ある落とし穴があることに気づいた。我々が視覚という感覚を持ったときから、すべては「見えていた」のであり、そこに解答がずっと前からあったということである。つまり、私たちが何かを探ろうとするためにものを見るという視線の先には、実際のところ、何があるのだろうか。

第二章「重ねられるイメージ—事物のどの部分を見るのか」では、カルヴィーノによる逆説的な表面の議論を出発点に、我々は事物を「どのように」見ているか、について考察した。なかでも自作品《desk》(2005年)や映画の表面的な部分から、深層を探ることを試みた。ここから、ものの本質は至る所に存在し、「表面」や「中身」とは、主体の定義によって左右される、言葉の問題であったことを示した。さ

らに、そこに我々の想像行為が伴ってくるのだが、ここで注目したのは、ものを見る際には、「いま眼前にある物の姿」と「我々が恣意的に想像した姿」の二つのイメージが生まれている、ということであった。これら二つのイメージは、まさに事物の表面上で重なり、我々の目に映る。その擦り合わせの結果を、我々は視覚世界として「見ている」にすぎない。また、このように、何かを「見ること」に我々の意識の介入が避けて通れないのであれば、実際のものの姿はこれとは別にある、と考えられる。

第三章「託されるイメージ—言葉とイメージのどちらを知るのか」では、事物という対象物から一度離れ、我々の日常から切り離すことのできない「言葉」を例に、イメージのあり方を考察した。声や詩を例に考えてみると、言葉とはあるイメージを運ぶためのツールとしての役割を果たしている。また、言葉のもつ作用を分析してみると、美術作品において、作り手と鑑賞者の解釈のズレが生まれる要因と、近似した現象であることがわかった。これらの現象の背後にこそ、ものの本当の姿、つまりは我々の恣意的なイメージの影響を受けない「中立した領域」が残されていることを見いだしたのである。

第四章「向かい合う試み」では、これまでの議論をふまえ、リチャード・ライトの《Untitled》(2009年)における作品の純粹的存在についての考察に加え、私がこれまで書き続けてきた、制作における自らの眼差しのドキュメントを挿入した。自作品《Traces-Touch》(2006年)、《Invisible Books》シリーズ(2004年～継続中)、そして《Traces-Dots》シリーズ(2009～2010年)についての手記から浮かび上がるのは、表層を何度も塗り直していくイメージの更新は、尽きることなく続けられるのかという問いである。はたして、そのものが唯一のそれであるという「中立した領域」にいられる時間は、一体どのくらいなのであろうか。私は現在もなお、作品制作を通じてその時間を模索している。

終章「意識、透明な痕跡」では、これまでの各検証から得られた知見によって導き出された、不可視の状態を創るという、創作手法の必要性を述べた。ものがそれ自体の純粹な存在でいられる「中立した領域」は、不可視の場所にある。このことから、私がかつてから求めていた、ものの本当の姿に向かい合うこと、それは、そのものが「見えない状態」にあるという作品において、はじめて可能になるのである。

(博士論文審査結果の要旨)

当論文の著者、杉山礼香は、東京芸術大学絵画科油画の学部および同大学院修士/博士課程を通じて、視覚・造形表現の根幹に関わるイメージとその認知の問題をテーマに作品制作に取り組んできた。作品形式は、光と闇と色彩、本や文字といったメディアをミニマルに使ったインスタレーションなどが主であるが、当論文は、そのような杉山の表現者としての創造原理を主体的に、また客観性をもって著述する行為をもって、洗い出そうとする地点から始められ、成立している。

イメージと認知の問題は、個と社会の分裂によって、主観と客観の関係が複雑に錯綜するようになった近現代以降の芸術や人文科学一般の命題となってきたことは周知の事実であるが、杉山は、視覚的なイメージの発生の根底にある世界認知、人間の意識と言葉の問題に還って、認知論や言語学において究められてきた境域に触れつつ、それがまた現代美術の作品や映画において、どのような作品構造となっているかを適確に参照している。文献や美術史的な作品の参照と同時に、直接、対面した作品分析も行いながら、論考は、あくまでも自己主体がイメージと意識の境域にあって、創作する行為と作品の原理を問い、洗い出そうとする強い意志に貫かれ、張りつめている。

以上のような評価において、表現者を志す者の論述にふさわしい本旨と可能性をはらむ本論文は、優れて博士学位者に値するものと認められる。

(作品審査結果の要旨)

杉山礼香は、本論文「意識、透明な痕跡」の論考において、ものを「見ること」における考察と、「不可視の状態」「中立した領域」として語られるものの探求を行っている。作品を作る上での形而上の諸々のことがらを形而下の行為や物質への探求で表そうと試みる。この表すという云い方にはやや誤りがある、不可視のものを我々が感受することが出来るような仕組みを作ろうと試みるのである。そこではそのもの自体はむしろ見ることは出来ない。また、杉山自身が「見ること」における省察をした内容が眼差しのドキュメントとして記録されている。作者である杉山自身が何を見ていたかの記録である。そして、「表層を何度も塗り直していくイメージの更新は、尽きることなく続けられるか?」、「そのものが唯一のそれであるという、それだけのための領域にいられる時間は、一体どのくらいの間なのだろう」と云う杉山の呟きのような問いかけと探求の行為が強い思いと情熱をもって成されていることを読み取ることが出来る。

「Invisible books」 この作品においては、本と云う存在、その物性、全てのページの紙の表面、そこに探求の視点が向けられている。この制作に対しては、先行する作家にアン・ハミルトンが挙げられよう、アン・ハミルトンも杉山と同様にページを指でこすり文字が消された「本」を行為の末に提示している。ハミルトンは、全ての文字が消されてある物語が完結する、もしくは、完遂されると述べている。一方、杉山のものはライフワークとして企図されていて、このシリーズはまだ終わっていない。それぞれの「本」は、ページを開いた状態で置かれていて、そこには僅かに残った文字や挿絵の一部のイメージを見ることが出来る。別の「本」ではそこに記録されている建築物の庭園の土に埋められていたために土に汚れた跡を見ることが出来る。物質性の強い痕跡とともにその庭園の形がページに切り抜かれてあるのが見て取れる。残された僅かな痕跡からその先の物語を読み解くような、見えない物語を巡る検証作業が「本」というある物性と一定の量をもった塊に対して今も、そしてこの先にも続いていくのである。この点において、「Invisible books」シリーズでの杉山の独自のアプローチが見て取れる。

「Traces-Touch」 杉山自身の制作途中の考察の記録としての文章が作品に対しての重要な視点を語っている。書かれた文字や描かれた形、この場合は指に付けられたオレンジ色の絵具が指紋の形で紙の上に堆積していくのであるが、その質が赤い光の中で姿を消し見えなくなるという仕掛けが展示空間に設えてある。杉山がそれらを語る視点は「生と死」である、生と死の隠喩で記述するのである。赤い色の光の中に佇むうちに次第になにかが見えてくる。指紋の重なりが別の質として見えてくると云う。この時間の経過や鑑賞者に起こる変化は、ある種の忍耐を必要とするかもしれない、その経過の中でそれまでと異なるものへの知覚と意識に誘い込むような仕掛けが、この作品の要となっていると云えよう。

「Reading-Blue」 最も新しい展開の作品である。「言葉にのるイメージ／夢の描写」の項で触れられているように、杉山自身が見た夢を題材に記述し、それを文字と色と音で再現している。2008年に制作されたが博士展において更に展開した形で新たに発表されている。このインスタレーション作品においては、広い空間自体が夢の記述にある青い色に染まったなかであり、中央奥にある机の場所のみライトが置かれていて明るくなっているが、その周囲は次第に闇にとけ込むかのような状態にある。机に直に刻まれた夢の記述、夢に現れた「鳥」のようなもの、それは無数に増えて「海」に変わる。空間に聞こえている心臓の鼓動は、「海」のイメージにも重なっていく。杉山の手で羽毛や羽根を丸めて作られた無

数の白い球形のものがこの空間の床面を埋めている。入り口付近でも我々鑑賞者の足下に不意に置かれてあることに気づくのである。夢は隠喩に富み、解釈は時には限りなく変化し更新されてしまう。限定不可能な迷宮のようなところである。杉山は其中で、自身の言葉で記述して、そこに色と音を与え、それらとイメージが変容する様を検証している。杉山の作品のなかではイメージをダイレクトに扱う点で、大きな展開をもたらしている。

「距離と時間からの解放。そんな不可能に近い状況を、私は意識と言う想像力のなかで、可能にする。」という杉山自身の思いのこもった言葉がある、検証と制作体験から、「見る」という眼差しの、その先にあるものを深い情熱をもって探求する杉山の制作行為とその作品は課程博士学位に相応しいものとして高く評価する。

(総合審査結果の要旨)

杉山礼香の作品は「「Reading-Blue」、死を超えるもの[Traces-Touch]2006」、「Invisible Booksシリーズ」の3つのシリーズ作品である、3点は共にインスタレーションの形式で提出された、作品は作る上での形而上の諸々のことがらを形而下の行為や物質への探求で表そうと試みる。作品はこのための装置として制作される、従ってそこには見る物はなく「中立した領域」「不可視の状態」が出現している、最近作では杉山は夢を契機にして光の色、音、羽毛や羽根を丸めて作られた無数の白い球形のものによってイメージの変容するインスタレーションの中に新しい表現の地平を切り開こうとする。

論文「意識、透明な痕跡」は、杉山は、自己の見ることへの懐疑と問いかけから不可視の状態の提示に至る自己の制作の根拠を論述していく、また、見るという眼差しのその先にあるものを探求する、論文講成は自己の見ることと意識の関係性を検証する一章、二章から最近作の「Reading-Blue」にインスタレーション作品に至る音、言葉、物、イメージの中立した領域を露にする三章、自作や私記を解析しながら「中立した領域」について論考し、見えない状況において、「不可視の物と向かい合う」という手法を終章で獲得する。自己の執拗な制作意志が論文中に強く貫かれ論述されている。

杉山の論文とその作品は現代の芸術表現の新たな地平の断片を鋭く示していて、課程博士学位に相応しいものとして高く評価する。